

学部・研究科等の教育に関する現況分析結果

学部・研究科等の教育に関する現況分析結果（概要）	教育 0-1
1. 医学部	教育 1-1
2. 医学系研究科	教育 2-1

学部・研究科等の教育に関する現況分析結果（概要）

学部・研究科等	教育活動の状況	教育成果の状況	質の向上度
医学部	期待される水準にある	期待される水準にある	質を維持している
医学系研究科	期待される水準にある	期待される水準を上回る	質を維持している

医学部

I	教育の水準	教育 1-2
II	質の向上度	教育 1-4

I 教育の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目 I 教育活動の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点1-1「教育実施体制」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 平成 19 年度文部科学省新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（学生支援 GP）に採択された「地域「里親」による医学生支援プログラム」を継続して実施し、地域で活躍する同窓生や地域住民が「里親」や「プチ里親」となり、将来、滋賀県内で働くことに興味を持つ医学生や看護学生に対し、生活や進路についての助言等を行っている。
- 医学科では、平成 24 年度の文部科学省基礎・臨床を両輪とした医学教育改革によるグローバルな医師養成事業に採択された「産学協働支援による学生主体の研究医養成」により、学生の主体的な探究活動をサポートしながら研究活動の場を提供する「入門研究医コース」と、学生が具体的なテーマを持って研究活動に参加する「登録研究医コース」を設けている。「入門研究医コース」の学生は平成 24 年度の 18 名から平成 27 年度の 31 名、「登録研究医コース」の学生は平成 24 年度の 0 名から平成 27 年度の 31 名となっている。

観点1-2「教育内容・方法」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 医学科では、専門教育科目において、モデル・コア・カリキュラムに基づき、臓器・器官別の系別統合講義を行っているほか、小グループによる少人数能動学習によるコミュニケーション能力等の修得に取り組んでいる。また、5 年次からの臨床実習では、地域の医療機関等で医療チームの一員として診療に参加するクリニカルクラークシップ（診療参加型臨床実習）を行っている。
- 平成 16 年度文部科学省現代的な教育ニーズ取組支援プログラム（現代 GP）の「産学連携によるプライマリ・ケア医学教育」及び平成 17 年度に採択された、文部科学省地域医療等社会的ニーズに対応した医療人教育支援プログラム（医療人 GP）の「一般市民参加型全人的医療教育プログラム」を継承し、正規の科目として「臨床実習」における診療所実習や「全人的医療体験学習」を実施し、地域に定着する医師、全人的医療ができる医師の育成に取り組んでいる。

以上の状況等及び医学部の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 教育成果の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点2-1「学業の成果」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）における医学部の標準修業年限内の卒業率は、87.7%から94.9%の間を推移している。
- 第2期中期目標期間の国家試験合格率（既卒者を含む）は、医師が91.4%から99.0%、看護師が92.9%から100%、保健師が97.1%から100%の間を推移しており、助産師はすべての年度で100%となっている。

観点2-2「進路・就職の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 第2期中期目標期間の卒業生数における就職者の割合は、医学科が90.8%から97.1%、看護学科が89.2%から94.4%の間を推移しており、主に、臨床研修医、看護師等として就職している。また、臨床研修医のうち県内で勤務している者の割合は、34.3%から47.7%の間を推移している。
- 平成21年度から平成25年度の卒業生への学習成果に関するアンケートにおいては、医学科では医学等の知識については93.7%、医学等の技能については86.5%、協調性、責任感については93.5%、看護学科では、看護学等の知識については87.4%、看護学の技能については63.7%、協調性、責任感については80.2%が肯定的回答をしている。

以上の状況等及び医学部の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

Ⅱ 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「教育活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 地域に定着する人材の育成を目的に、入学者選抜試験において地域枠を拡充し、地域病院に活動拠点を設けた臨床実習を開始するなど、地域の状況を見据えた活動拠点を増やしている。
- 高齢化社会への対応として、訪問看護師を育成するプログラムを構築し、平成 27 年度から開講している。
- 基礎医学研究医の不足への対応として、研究医コース（2 コース）を設けており、参加する学生は平成 24 年度の 18 名から平成 27 年度の 62 名となっている。

分析項目Ⅱ「教育成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 第 2 期中期目標期間の国家試験合格率（既卒者を含む）の平均は、医師が 94.2%、看護師が 98.5%、保健師が 99.0%、助産師が 100.0%となっている。
- 第 2 期中期目標期間の卒業生数における就職者の割合の平均は、医学科が 93.5%、看護学科が 93.1%となっており、主に医師、看護師等として就職している。

これらに加え、第 1 期中期目標期間の現況分析における教育水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

医学系研究科

I	教育の水準	教育 2-2
II	質の向上度	教育 2-4

I 教育の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目 I 教育活動の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点1-1「教育実施体制」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 平成 26 年度に博士課程を改組し、先端医学研究者、高度医療人及び学際的医療人の1専攻3コースを設置している。
- 第2期中期目標期間（平成 22 年度から平成 27 年度）における入学定員に対する社会人入学者の割合の平均は博士課程が 79.4%、修士課程が 75.0%となっている。

観点1-2「教育内容・方法」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 博士論文は国際学術雑誌に受理されることを基準にしており、客観性、透明性及び公平性を高めるため、審査に学外者を含めている。また、修士課程では1年次は研究デザイン発表会、2年次は中間発表会、修士論文発表会を実施し、修士論文発表会では、外部評価者3名により、7項目の客観的評価を行っている。
- 博士課程の研究指導では、2年次は希望者に、3年次は全員にプロGRESS・レポートを提出させるとともに、ポスター発表会へ参加させ、中間評価を行っている。ポスターは公開展示し、異なる研究分野の教員から指導や評価を受けている。また、ポスター発表会では内容を点数化し、表彰によりモチベーションの向上等に努めているほか、問題点を学生や指導教員に伝えて改善を図っている。

以上の状況等及び医学系研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 教育成果の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点2-1「学業の成果」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 社会人入学者を受け入れており、第2期中期目標期間の標準修業年限内の修了率は、修士課程が33.3%から80.0%、博士課程が40.9%から56.5%の間を推移している。また、標準修業年限の1.5倍以内の修了率は、修士課程（3年）が80.0%から100.0%、博士課程（6年）が92.0%から95.7%の間を推移している。
- 第2期中期目標期間の授業評価（4段階）について、肯定的回答をした者の割合について、博士課程では講義内容の理解は82.5%から90.2%、授業満足は89.7%から97.7%の間を推移している。また、修士課程では授業満足は75.7%から88.5%の間を推移している。
- 平成24年度から平成26年度の博士論文の多くが国際学術雑誌に掲載され、国際的にも評価の高い学術雑誌や、マスメディアで報道されている。

観点2-2「進路・就職の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 第2期中期目標期間の修了生のうち、就職した者の割合は博士課程が86.4%から100%、修士課程が66.7%から100%の間を推移している。また、博士課程において、教員、研究者は平成22年度の3名から平成27年度の9名へ増加している。
- 平成21年度から平成25年度の修了生を対象に行った学習成果に関するアンケートで、博士課程では、医学等の知識については84.7%、医学等の技能については88.7%、協調性、責任感等については87.5%となっており、修士課程では、看護学等の知識については90.7%、看護学等の技能については78.0%、協調性、責任感等については85.8%が肯定的回答をしている。
- 平成25年度における修了生の就職先へのアンケートによると、「患者に対する態度」、「メディカルスタッフに対する態度」、「チーム医療を構築する能力」に対して、肯定的回答をしている者の割合は、おおむね80%を超えており、特に「患者に対する態度の評価」は90%を超えている。

以上の状況等及び医学系研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

Ⅱ 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「教育活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 博士課程を改組し、平成 26 年度から先端医学研究者、高度医療人、学際的医療人の 1 専攻 3 コースを設置している。
- 博士課程、修士課程ともに、医師、看護師等の医療従事者等のニーズにこたえ、継続的に社会人学生を受け入れており、入学定員に対しておおむね 75%以上となっている。

分析項目Ⅱ「教育成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 博士論文は国際学術雑誌に受理されることを基準にしており、平成 24 年度から平成 26 年度に掲載された論文のうち 6 件は国際的にも評価の高い学術雑誌に掲載されている。
- 平成 23 年度から平成 27 年度の修了生への学習成果に関するアンケートでは医学・看護学等の知識、医学・看護学等の技能、協調性、責任感等について、肯定的回答をした者の割合の平均は、おおむね 80%を超えている。また、平成 25 年度に実施した修了生の就職先へのアンケートでは、「患者に対する態度の評価」が 90%を超えている。

これらに加え、第 1 期中期目標期間の現況分析における教育水準の結果も勘案し、総合的に判定した。